富山の生物　54（2015）
富山県生物学会創立90周年特集

富山県生物学会の90年間の活動～初期の活動を中心として～

会長　南部久男

はじめに

富山県生物学会は前身の富山博物学会が大正14年に創立してから平成27年で90周年を迎える。長い歴史を振り返っておくことは今後の活動のために欠かせないことであり、主に会誌から初期の活動を中心に述べてみたい。

活動を知ることのできる会誌等

前身の富山博物学会の活動内容は富山博物学会誌（1，2，3号）で知ることができる。会誌の変遷については本誌で福田副会長が紹介しているが、富山博物学会、富山生物学会及び富山県生物学会の会誌は通巻で、今号で54号となる。創立45周年（会誌11号、昭和45年）、50周年（会誌16～17号、昭和52年）、60周年（会誌27号、昭和62年）、65周年（会誌31号、平成3年）の各記念号には、それまでの活動が分かりやすくまとめてある。富山博物学会の創立者の一人で、初代会長の菊池勘左ェ門（以下各人の敬称略）の亡くなられた時に発行された追悼冊子「菊池勘左ェ門」（菊池，1970）には、菊池が残した文章（記念講演など）が再録され、菊池の経歴や人柄を知ることができるほか、菊池自らの富山県生物学会に関する記事や会員の記事も多数掲載されている。これら等を参考にしながら、活動を振り返ってみたい。私の思い違いもあると思われるので、主要なことは本会の会誌等を引用する形で紹介し、会誌は本文中で号数と発行年だけで示し、それ以外の文献は参考文献で示した。直接の引用は『』で示し、主要な事柄を引用した場合は「」で示した。年は、原則として時代の変遷が分かりやすい大正、昭和、平成を用いた。旧字体は新字体に改めた。

富山博物学会の設立

「富山博物学会誌」第1号は昭和11年に発行された。創刊の辞には『……各地方の会は地方の特異性ありてその存在の意味充分あるものなり。此ところに生ずべくして生まれ出た本誌、会員各位の協力により健実の発達を期す。』と記され、富山博物学会記録には『大正十四年九月二十九日本会の設立趣意書を県下中等学校博物科担任教師及び有志諸氏に送り十月十日富山県師範学校に於いて第一回総会をなす。集まれるもの二十一名』とある。当日制定された規則の第二条には『本会は博物学に関する事項を攻究し併せて斬学の普及をはかるを以って目的とす』、第3条には会の目的を達するため、「講和、標本展覧及びその交換、質疑応答、採集旅行」を行うことが挙げられている。昭和9年6月まで、71回の例会が行われ、講話は主に県内外の動植物に関連した内容であるが、地質もあり、多岐にわたる。採集旅行の場所は、能登島、虻が島、陸上では神通川、大岩、黒部峡谷、立山等で、植物、海産動物、化石など、海から山地まで様々である。会員名簿には59名が挙がっている。

進野久五郎は会誌20号（故菊池勘左ェ門先生追悼号、昭和55年）で、「菊池（勘）先生のわすれられない思い出」と題し①教職員としての教化、②富山博物学会から富山県生物学会へ③富山湾生物調査の委託、④富山湾生物の発表と表彰、⑤フィールド余禄、に分けて回顧している。②の中で、菊池、進野ら5名で「富山博物学会」を創設したとあり、会員は、小中等学校教師、試験場関係者、医師の有志48名で、フィールドの実地調査、例会、研究発表会を重ね、初期はこの会に会長を置かず、菊池幹事長と進野理事で運営したと述べられている。

特筆すべき富山博物学会の初期の活動

⑴　富山湾生物調査

進野（会誌20号、前出）は前述の③、④で、「富山県教育会は、郷土資料館の設立と科学調査

の計画から、昭和４年度から10年度までの７年間、菊池先生を中心に進野ら４名に富山湾生物調査を委託し（実際は菊池と進野が調査）、沿岸、魚場、雨晴、唐島、虻島、能登島、特に蛸島の弁天島で磯採集に力を注ぎ、地引網、手繰り網の獲物を探した」、「７年の調査は並みたいていの努力では為し得ない実績で、断片的に発表され、関係大学その他の研究者との連絡、欧米旅行中に特殊な分野の指導を受けた」と述べ、昭和11年に知事より表彰を受け、文部科学省から自然科学研究奨励金も交付されたことも記している。当時の知事に1500種を報告し、個体数は万をもって数ふるに至るとし、新種は20余種に及ぶとしている。富山教育会の会誌「富山教育」には、教育会の事業として富山湾調査のことが報告され（富山県教育会，1930）、調査結果は菊池が富山教育で何回かに分けて報告している（例えば、菊池，1929）。

④で、『教育会が企画した「富山県郷土博物館」は、古校舎を利用し、標本箱と戸棚若干設備してあったが、戦災で烏有に帰してしまった』、とある。恐らく、博物館の構想が具体化すれば、富山湾生物調査で集められた標本は、そこで収蔵する計画であったと推察される。

「富山県科学展三十年史」（富山県教育会・富山県理科教育振興会，1972）の中で菊池（1972）は、富山湾調査について「昭和のはじめ、富山県教育会で富山湾調査が計画され、菊池、進野ら４名に委嘱された。東は宮崎から北は禄剛崎までの海岸を採集し、ドレッジも100回以上曳き、魚津、滑川、生地の魚市場にはホルマリンの大かめをあずけて、お金にならない珍しい魚介類をあずけてくれるよう依頼し、その標本の量は夥しかった。」と述べ、また、「当時富山県教育会館はお城の西堀の外にあり、相当大きな建造物で、多くの部屋が空き室であり、そこに科学博物館をつくることを考え、科学博物館を建設する目的で、長岡市の積雪博物館、東京上野の科学博物館、大阪の電気博物館等を視察したが、物資の大切な時で意見は却下された。」、という内容のことを述べている。

菊池（1976）は富山教育学窓の総会の記念講演で、富山湾調査の標本との関係について、「科学博物館調査のころ富山湾の材料が、非常にたくさんあつまりましたので、わたしはこれを私蔵するのはまことに惜しいと思いまして、富山で、科学博物館をつくったらどうかと……』と述べている。また、長井眞隆も、会誌20号に菊池が同様なことを述べているのを紹介している。

⑵　富山県科学展

前述の富山県科学展30年史に、菊池、進野らがそれぞれの立場から科学展について回顧している。菊池（1972）は、科学館構想が実現できないことから『これにかわるべき科学教育の振興、児童生徒の発明発見力の開発方法としての科学展覧会開催を考え、知事も賛成し、最初は県下の各事業会社に働きかけ、その製作過程と、その製品展示する展覧会を教育会館で開くこととした。……次年から学校を中心とした科学展覧会を開くこととし、県下の理科の先生方に相談し、数回富山教育会館に会合し、大和百貨店の５階ホールで開くこととなった。』とある。進野（1972）も同誌で『県生物学会の前身である富山博物学会をはじめたのは大正14年で、地方学会としては全国でも早い部類であった。生物教育は単に教科書の知識では役にたたず、野外の実際にふれる学習で始めて生きたものとなることなので、教師みずからがその基本的態度を身につけることの必要から生まれたものであった。富山地学会、富山県理化学会また同様の学習活動が進められていたので、本当の理科教育全般にわたって子供たちにもその調査研究態度が普及してきたことが事実で、更に一層の進展と普及を思いたち、関係学会が連携して……教育会が中核となって昭和16年秋・大和の前身大丸と、消失した教育会館の二会場で開き大入り満員の盛況でスタートしたのであった。』と述べている。

⑶　富山市科学博物館へ寄贈された標本群

富山市科学博物館（平成19年のリニューアルに伴い富山市科学文化センターから富山市科学博物館に名称変更）は、昭和54年にオープンした自然科学系の総合博物館である。

科学博物館には、富山博物学会の初期の会員や富山県生物学会の会員も含め植物、貝、昆虫、魚類等８万点もの標本が寄贈され、多くが目録とし

てまとめられている。主なものは、富山市科学文化センター収蔵資料目録第１号「進野久五郎植物コレクション」(1987年発行)、同２号「高柳コレクションを中心とした富山と能登の貝」(1988)、同３号「田中晋淡水魚コレクション」(1989)、同４号「長井真隆・吉沢庄作植物コレクション」(1991)、同８号「大田弘植物コレクション」(1995)、同10号「菊池勘左ェ門　貝コレクション」(1995)、富山市科学博物館収蔵目録第28号「小路登一植物コレクション」(2015)。このうち、海産動物及び植物のデータの一部は、日本国内のサイエンスミュージアムネットワーク（S-NET)、地球規模生物多様性情報機構（GBIF）に登録され、前者は日本語で、後者は英語で公開され、インターネットを通して世界中で利用できるようになっている。古い標本では明治時代後期（植物）のものもあり、県内の生物相の変遷や多様性を知る上で貴重な財産となっている。また、標本は記述や写真だけではわからない詳しい形態を再調査できるため、科学的（再現性が重視される）であり、近年は標本の状態によっては系統・進化を知る上で重要なDNAも抽出できるようになってきた。

戦後の活動

⑴　富山博物学会から富山生物学会、そして現在の富山県生物学会へ

進野は、富山生物学会報NO.1（昭和26年発行、通巻４号）の「富山生物学会の想い出」の運営の項目の中で、『昭和22年未だ混乱の中から本会の活動も再起し、永年親しまれた「富山博物学会」を「富山生物学会」に改め会員も僅かにふえたので始めて会長と理事制に改め、富大教授を中心に顧問を委嘱し、生物研究とその教育指導に努力しているのである。』と述べ、富山生物学会会則の第二条には、「本会は生物学の研究並びに生物教育の奨励を期することを以て目的とす」とある。会誌第5号（昭和28年）で進野は「序　復刊の喜び」の中で、『この会誌は、地方学会の性格が特殊性をもつように、中央学会誌とは少々任務と味が異なり、わが会員の誰でもが、小さな郷土的教材資料や些細な観察でも、指導体験談や研究着想など、親しみのある気楽な語り場でありたい。』と述べている。

会誌第６号（昭和39年）で進野は「序　会誌復刊の歩み」の中で、『……22年頃から活動に入ったけれど、博物の教科名もなくなり教育の大転換となり、本会も教材研究と指導法にも努力せざるを得なかったので会名も富山県生物学会としたのである。……昭和31年11月富山県より優良文化団体として表彰されたことも忘れ得ない印象で名は体を表すと申されるので、本会名も三転して「富山県生物学会」となり……』とある。

本多啓七は会誌16～17号（昭和52年）の「創立50年の歩み」の中で、戦前の昭和16年～20年を学会活動の休止時期とし、『昭和16年の大東亜戦争の勃発は、理科振興の時代をまねき、国民学校初等科１学年から理科が行われ、中学校では従来の、物理、化学、博物が新しく、物理と生物になったので、ここで長い伝統をもってきた博物学会も、戦時の休止の間に生物的傾向がだんだん濃厚化していった。これが終戦後学会が復活した際に、生物学会と地学会に分離された』と述べ、さらに、昭和21年～29年を、「復活・生物分野での活動する時期」とし、「戦後の学制改革により、本県には大学をはじめ数多くの、高等学校、中学校が誕生し、指導的な先生方ばかりでなく、小中高の先生方もさかんに発表されるなど活動の旺盛な時期であった。昭和26年に富山県教育委員会から表彰を受けている。」と述べている。

⑵　学校教育との関係

会誌第８号（昭和42年度）の「学会の回顧録」の中で本多啓七は、「昭和30年度から昭和35年度の活動」の「昭和30年度」の「本会の在り方について」という項目で『４月１日以前までは、富山県生物学会は教育研究的性格をもっていたが、これは戦後、富山県高校生物教育研究会及び富山県理科教育研究会（主として中学校）の中に於いて行われ、本会は生物同好の士によって会員相互の親睦と漸道研鑽を図るという本会本来の目的によって新発足した。』とある。創設50周年記念特集の第16～17号（昭和52年）で、進野は『昭和26年３月、菊池会長が佐渡に帰られ、私がそのあとをつ

いだのであるが、丁度教育制度の変革と教育課程、教科書の一変となり、会員は全部教育関係者であったので、別に小教研、中・高教研ができ、教材研究や指導法の研究などに追われ、更に縦につらぬく県生物教育研究会の誕生となり当学会とその運営が重複する一時期となったのである。十数年を経たので、当学会の原初へ復活の主張となり、大学並びに中央の学者の指導を期し植木教授にバトンタッチしたのである。』と述べている。本多も同誌の「創設50年の歩み」で昭和30〜44年を生物研究を志向する時期とし『教育研究が組織化される時代となり、大学においては一層アカデミックな研究体制が必要となってきたので、ここで学会は、教育研究を、富山県理化教育研究会（小・中学校)、富山県高校生物研究会に任せ、アカデミックな研究を舞台とする性格の学会として活躍することとなり……』と述べている。第12号（昭和46年）の富山県生物学会会則の第２条の（目的）には、『この会は、富山県における生物学の研究を行うことを狙いとし、あわせて会員相互の親睦を深めることを目的とす』とある。

戦後の学制改革により、昭和29年あたりから、生物学会の教育的性格は、学校の理科関係の団体へ移り、会は研究主体になっていったようである。

昭和の後半からの活動

⑴　自然環境の変化、生物学の専門化

小林貞作は、会誌11号（昭和45年）で『1970年代に移り、いよいよ生物科学本番という時代に入った。すなわち生命現象に対する集中的な解析を行う一方、各種の公害問題や自然愛護などの教育施策（が）生物科学に課せられた……』、３号（昭和58年発行）で、『最近の新聞紙上には、生物工学（生命工学、バイオマス）あるいは遺伝子工学という活字が頻繁に見られるようになった。これらはともに先端科学技術とも呼んでいる。』、26号（昭和61年）で『開発優先・都市化拡大といったバランスを失った変則経済のヒズミと上昇のみを追う政治・行政の結果、今度は都市砂漠化進行・休耕廃（裸）地進行という姿が富にひどくなった。』等と述べている。

本多啓七は30号（平成２年）で『国境を越えて地球全体に及んでいる酸性雨による森林や湖沼への被害、フロンガスによるオゾン層の破壊、CO2やフロンガスなどの「温室効果ガス」の濃度の上昇による地球の温暖化など、……』、31号（平成３年）で『例えばベトナム枯葉作戦による大被害、最近では原油放出によるペルシャワンの生物死滅による大問題などは、……』と述べている。

昭和40年代から平成初めの巻頭言からは地球的な環境の変化や学問の専門化が進み、会でもこのようなことに対する意識が高まっていたようだ。

⑵　会の活動

小林は、会誌11号（昭和45年で『時代の変遷にともなって、本学会のあり方も、当初とは大きく変革発展しつつあることは当然であるが、その底流にあるアカデミックな「科学するこころ」の気風は、連綿と続いていると確信している』、12号（昭和46年）では、『もとより、富山県生物学会は、生物科学を愛好する、全くフリーな立場での同好者の集まりであるから、無縫奔放に、アカデミックなものから実社会の現実的なものに至るまで、誰に気かねすることなく、論述することができるのである』と述べている。

本多啓七は、会誌16〜17号で、昭和45年〜51年を「会誌発行と創設記念大会を行っている安定期」とし、『……野鳥の会、植物友の会などが続々生まれ、また、生物関係の中央の学会に加入する方々も増加してきたので、本学会の在り方についても、色々と検討が行われた。しかし、大学を通して育成された生物研究を志向する態度なり、技術は、現在さかんとなってきた自然環境調査なり、自然保護の精神となって大きく羽ばたいている状態である。』と述べている。

小林は、28号（昭和63年）は巻頭言で、『わが富山県生物学会は、創設以来基礎生物学、すなわち、分類・生態・生理・細胞など各分野で、多くの業績を挙げてきた。』と述べている。過去の会誌の内容や例会をみると、このような分野やフィールドでの調査や研究も多く行われている。

⑶　会誌「富山の生物」について

32号（1993）の編集後記に『単に生物学会誌で

は内容がはっきりしないという声もあり、編集委員会でいくつか提案した結果、会長に「富山の生物」を選出してもらい……』、『内容は学術的にオリジナリティのあるものを原著とし、貴重な生物資料（これは極めて大切）を資料編として区別しました。』、『富山の生物に関する知見が増え、学術的に価値の高い内容になればと願っております』と記されている。

⑷　総合調査の開始

布村昇は48号（平成21年）の「氷見市余川川流域の生物調査にあたって」で、『富山県には多様で豊かな自然があるといわれながら、きめ細かい調査は少なかった。富山県生物学会は植物、動物にわたる旺盛な調査意欲を持つ会員がおり、それぞれ貴重な研究をしているので、会員が共同で調査を行うこととして、……』と述べている。学会記事の「20年度生物総合調査」にも『富山県の生物相を明らかにするとともに会員相互の連携と研鑽を促すことを期待し、共同調査を行うこととした。』と記され、様々な動植物の分野で、会員による身近で比較的小規模な河川の総合調査が行われるようになった。

⑸　近年の生物学会を取り巻く現状

布村は50号（平成23年）　の「富山県生物学会誌50号にあたり」で近年の活動を振り返っている。その概要は、「会を取り巻く社会情勢は、学問の専門化、細分化による中央の学会への志向、学校現場の多忙化が起こる一方で県内の自然関係の生涯学習施設の充実、会の役割分担の明確化や会誌の充実を図るなどが行われ、学会の活動の基盤整備が行われた。しかし、会員数の減少は続き、会の存続も議論されるようになり、役員の若返りや富山の生物相を明らかにするための総合調査の実施、公開型の観測会の実施、ホームページの立ち上げなどが行われ、夢と希望を持った多様な会員が独自性を発揮し、魅力ある会へ変貌を遂げる試みが始まった。」というものである。

まとめ

大正14年に、菊池、進野らによって富山博物学会が創設され、例会などが活発に行われた。昭和４年度〜10年度に、富山県教育会の委嘱により富山湾調査が菊池らによって精力的に行われ、標本は約１万点にも上った。標本を保管する科学博物館（あるいは富山県郷土博物館）構想もあったが、当時の戦時下の状況で断念された。それに代わるものとして（菊池による）、関係団体の協力のもと富山県科学展が開催され、今日まで続いている。また、初期の会員らによって収集された富山県を中心とする植物、昆虫、貝、淡水魚等の８万点ほどの標本は富山市科学博物館へ寄贈され、富山の生物相の多様性やその変遷を知ることができる科学的（再現可能であること）で、貴重な自然財産となり、一部は日本あるいは世界からインターネットを通して検索できるようになっている。

戦前の昭和16年頃からは会の活動を中止せざるをえなくなったが、戦後すぐに再開された。教育制度の改革とともに、発足当時からあった会の教育的な側面は、理科の教育関係へ団体が受け持ち、研究主体の活動をめざすという方向性があったようだ。昭和30年代頃からの公害問題や開発による自然の消失や変化、グローバルな環境問題等、人間生活をとりまく自然の変貌が著しく、人々の自然や生物への関心が高まっていった。会の活動は様々な分野で行われてきたが、初期の頃からフィールドでの研究もよく行われてきた。

近年は生物学（学問全体）の専門化・細分化によって中央学会への志向、研究者・教員そして会員の多忙化により会活動の不活性化が起きてきた。会活動の役割分担、会誌の充実、総合調査の実施、ホームページの開設、観察会の公開化などにより、会は徐々に変化を遂げている。

終わりに

近年は環境の変化が著しく、絶滅危惧種、生物多様性といった言葉も頻繁に聞かれる。様々な分野の会員のいる当会が活躍できる時代となっていると言える。既に述べられたことだが、会は親しみのある楽しい語り場であるとともに、多様な会員が独自性を発揮し、魅力ある会へと変化していくことを期待したい。

本文は、会誌の内容を中心にまとめたものであ

り、思い違いや抜け落ちがあると思われ、ご指摘をいただければ幸いである。

引用文献

菊池勘左ェ門，1929．富山湾生物調査の概況．富山教育．192：52－53.

菊池勘左ェ門，1976．富山の想い出あれこれ．富山教育学窓会．Vol.3.：7－14.

菊池三郎，1970．菊池勘左ェ門．130pp．正文社．東京.

菊池勘左ェ門，1972．科学展覧会の回顧．富山県科学展三十年史．p.2．富山県理化教育振興会編.

進野久五郎，1972．科学展覧会の回顧．富山県科学展三十年史．p.4．富山県理化教育振興会編.

富山県教育会，1930．会務報告．富山教育．197：39－40.

富山県教育会・富山県理科教育振興会，1972．富山県科学展三十年史．118pp.

参　考

富山県生物学会の年表

- 大正14年（1925年）富山博物学会の創設
- 昭和11年（1936年）富山博物学会誌第１号発行
- 昭和25年（1950年）富山生物学会と改称
- 昭和26年（1951年）富山生物学会報第１号発行（通巻４号）
- 昭和26年11月３日　優秀学会（富山県教育委員会）
- 昭和26年度　「富山県生物文献目録」を会員に配布
- 昭和31年（1956年）11月２日　富山県文化賞（富山県文化連盟会長）
- 昭和37年（1962年）富山県生物学会に改称
- 昭和45年（1970年）創立45周年　記念映画祭
- 昭和50年（1975年）創立50周年　記念大会
- 昭和60年（1985年）創立60周年・海外研修旅行（中国）
  - 記念大会
- 平成３年（1990年）創立65周年・記念大会
  - 生物写真展
- 平成18年（2006年）第１回総合調査　南砺市（旧平村）猫池
- 平成26年（2014年）第９回総合調査　南砺市山田川
- 平成27年（2015年）創立90周年

過去の創立記念の事業概要

1　創立45周年

⑴　生物科学映画祭　もんしろちょう、らいちょう、極楽鳥をたずねて、動物の楽園ガラパゴス（昭和45年10月４日　富山市公会堂大ホール）

会誌の特集はなく、11号（昭和45年）の巻頭言に触れられ、12号（昭和46年）に上記の事業内容が述べられている。

2　創立50周年

⑴　創立50周年記念大会
- 昭和50年10月18日　県民会館
- 研究発表　４題
- 記念講演
  「佐渡のトキ」
  佐渡博物館館長　菊池勘左ェ門先生
- 映画　佐渡のトキ（ＮＨＫ提供）

⑵　会誌　創立50周年記念特集　第16～17号　昭和52年発行

3　創立60周年

⑴　60周年記念海外研修旅行　中国　昭和61年８月８日～８月22日

⑵　創立60周年記念大会
- 昭和61年11月29日　富山市科学文化センター
- 記念講演　小林貞作先生「ゴマのきた道」
- 祝賀会　富山市職員会館

⑶　会誌　第27号　昭和62年（会誌は創立記念特集ではないが内容は創立60周年の歩みなど掲載）

4　創立65周年

⑴　記念大会
- 平成３年３月２日
- 研究発表会　６題
- 記念講演

「セサミロードのゴマ文化誌」
小林貞作先生

・映写会
「砂漠と水と生命、ライチョウは語る」
など

⑵　生物写真展（富山市科学文化センター共催）
・豊かな富山の自然―生物の営み―
・平成３年３月２日～３月17日

⑶　会誌　第31号　平成３年（創立65周年と故植木・坂下両先生の特集号）

歴代会長（年度）　（敬称略）

1925～1950年	（Ｔ14～Ｓ25）	菊池　勘左ェ門
1951～1967年	（Ｓ26～Ｓ42）	進野　久五郎
1968～1969年	（Ｓ43～Ｓ44）	植木　忠夫
1970～1987年	（Ｓ45～Ｓ62）	小林　貞作
1988～1990年	（Ｓ63～Ｈ２）	本多　啓七
1991～1998年	（Ｈ３～Ｈ10）	長井　眞隆
1999～2002年	（Ｈ11～Ｈ14）	田中　晋
2003～2005年	（Ｈ15～Ｈ17）	本多　省三
2006～2011年	（Ｈ18～Ｈ23）	布村　昇
2012～	（Ｈ24～　）	南部　久男